よかネット
YOKANET
No. 96　2009. 10
（株）よかネット

もくじ

NETWORK
地域の知的基盤づくり
～学術研究都市づくりのこれまでと今後～ …… 2
自分が住んでいるまちの安全・安心点検マップづくり …… 5
マイホーム健康診断ＤＶＤ制作
「住マイむなかた」居住関連サービス研究委員会の試み …… 7
JSURP 福岡支部　第１回まちづくり勉強会報告
「現代風水とまちづくり」 …… 8
３年目の糸島まるごと農学校 …… 8
オチコボレ論
オチコボレの戯言・その４
“自分自身の経営”を他人に頼むのか …… 10
見・聞・食
うまいものはうまい
折尾の美味しい餃子屋「兄弟」 …… 18
近況
阿修羅展は大混雑 …… 18
筑前に伝わる「荒神琵琶」を聞く
仏教琵琶　音楽法要 …… 19
社会人学生ならではの楽しみ …… 20
お知らせ
椎葉神楽へ行きましょう …… 20

●韓国人のパワーの源は野菜にあり！？

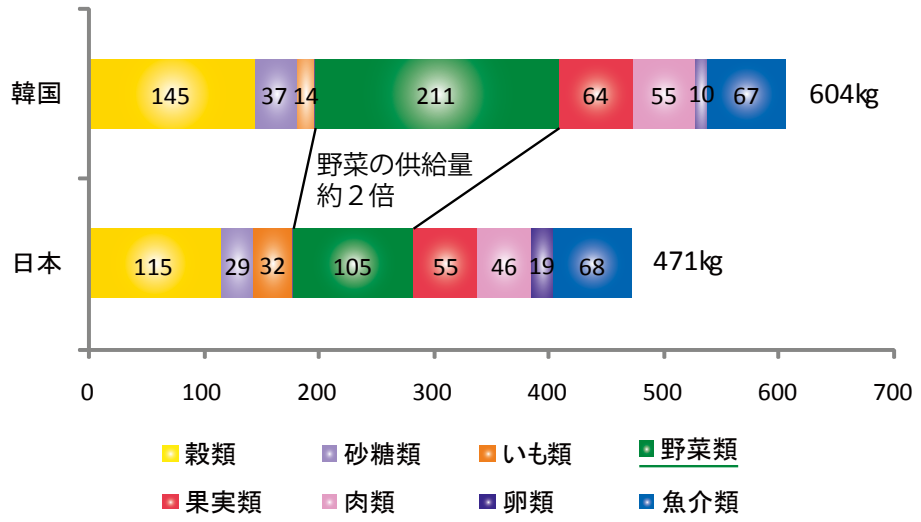
韓国では、日本よりも多くの野菜を消費するというイメージがあります。とくにキムチでの野菜消費量は相当あるのではないかと思います。そこで、韓国と日本の一人あたりの年間食料供給量をみてみました。

韓国では 604kg、日本は 471kg であり、韓国は日本よりも 133kg 多くなっています。

品目の内訳をみると、韓国の野菜類の一人あたり供給量は 211kg と日本の 104kg に対して約 2 倍となっており、食料供給量の差の大半は野菜でした。

2007 年の韓国における野菜類の自給率は 95%、日本は 80% であり、国内産、つまり野菜の自給率では、その差はさらに広がります。

韓国・日本の一人あたり年間食料供給量



資料：世界の統計 2009（総務省統計局）

地域の知的基盤づくり
～九州北部地域のこれまでと今後～

山辺　眞一

一昨年のことである。福岡県、佐賀県の共同プロジェクトとして進められてきた「九州北部学術研究都市構想（アジアス九州）」について、これまでの取り組みと今後の課題の総括調査が実施された。目標が達成されたということではないが、構想に掲げられていたいろいろな事業が実現してきた今、一つの区切りとして行われたものである。1992 年度（平成 4 年度）にこの構想の推進会議が設置され、翌年の基本方針策定から 15 年以上が経過していたことになる。

これより前、1987 年度に福岡県が最初に着手し基礎調査から 20 年の歳月が経過している。当社は、構想の立ち上げ当初から、様々な事業に関わってきた。

そのなかでは、構想の拠点地域での学術研究機能や研究開発機能の整備による地域の活性化に向けた計画、いわゆる学術研究都市づくりの計画策定の手伝いだけでなく、具体的な事業として、現在進められている九州大学の新キャンパス移転事業をはじめ、佐賀県のシンクロトロン光研究施設、むなかたのリサーチパーク、久留米の福岡バイオインキュベーションセンターなど、地域の様々な知的基盤の整備にも関わることができた。

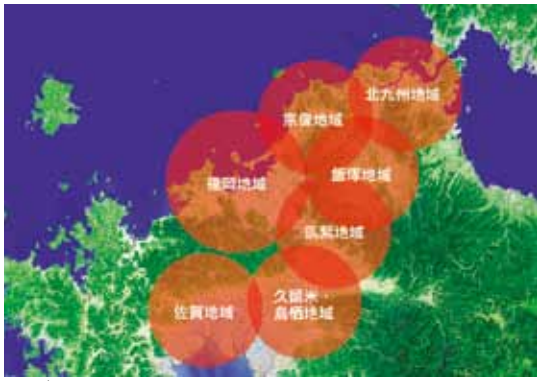
昨年度、ある自治体の調査研究でご一緒させて頂いた財団法人の方から、財団の機関誌に、九州北部学術研究都市構想のこれまでの取り組みを書かせて頂いた。構想の総括調査を前年度に実施した後、再度、構想の経過や事業を整理していく中で、過去を顧みることができ、これからの課題もおぼろげながら見えてきた。

本稿は、「地域づくりの軌跡」に記述した内容の中から、この構想が何を目的とし、何を狙いとしたものだったのか、その結果、どういうことが地域の成果として現れたのか、さらに今後の課題は何か、という三つの点について、再度整理を行ったものである。

●第三の学術研究都市を目指して

九州北部地域に立地する 7 つの都市とこれを中心とする地域を拠点地域として、このポテンシャルを生かしながら、文化・学術研究活動や研究開発活動のネットワーク化によって、知的活動の活性化を図り、地域の自立を目指すというのが構想の目的であった。

当時から、地域の知的拠点として大きな期待が寄せられていた大学や地域、企業との連携を強化することが、21 世紀型の地域づくりに必要であるということは、筑波研究学園都市や関西学術研究都市、さらに東北インテリジェントコスモスなど、全国の取り組みもあったが、この構想は、第三のモデルとして、ネットワーク型を切り口としていた。その狙いとしたのは、流出する頭脳、人材を地域にいかに定着させるか、そのためにどういう受け皿整備が必要か、さらに発展するアジア地域の中で、九州の生き方を主張し、次代の九州のためにどういう開発を進めていくべきかを解決することであった。その手法とは、地域の都市機能、学術研究集積、自然環境、人柄の良さなどを生かしながら、各々の地域が競争と連携により、切磋琢磨し、それぞれの違いを認めながらも、競争し生かし合うということであり、これがネットワーク型の学術研究都市づくりのコンセプトである。



アジアス九州の拠点地域

これは、新規の大規模な開発、一カ所集中型の筑波研究学園都市、関西文化学術研究都市に次ぐ第三の学術研究都市のあり方として、先例の姿を反省するという意味でもあった。
これまでとは違うコンセプトとして、新たなハコものを作る前に、「コト」を起こすこと、そのために必要な「知」の出会いや知的刺激のある交流を仕掛けること、これを推進する地域システムを構築すること、さらにこれをリードする人材を確保することなど、当時の構想検討に関わった人々の議論の場、そのものが知的な交流の場でもあった。

●地域発の都市づくりの提案

構想着手までの若干の経緯を述べると、1986年、福岡県では第４次全国総合開発計画の策定に先立って、九州の科学技術や基礎技術研究の水準向上をめざすという「北部九州研究学園都市整備の推進」が、福岡県21世紀へのプランの戦略的プロジェクトとして提案された。このプロジェクトの実現に向け、基礎調査が1987年度から２か年にかけて行なわれた。既にこの当時から、福岡県、佐賀県、北九州市、福岡市、久留米市、飯塚市などの各自治体において、研究学園都市あるいは学園都市づくりへの機運の高まりがあり、大学の研究教育機能、企業の研究開発機能、公立の試験研究機関など、「研究開発」を核とした地域活性化への取り組みが始められていた。

その契機となったのは、1983年のテクノポリス法であり、その後の頭脳立地法、民活法などの地域開発の手法であった。例えば、久留米市と鳥栖市では、久留米・鳥栖テクノポリスの地域指定を受け（1984年）、（株）久留米リサーチパーク設立、鳥栖北部丘陵新都市開発などの事業が進められていた。

しかし、経済のグローバル化が進み、製造業の空洞化が懸念されはじめ、著しい経済成長を遂げつつあったNIEs（韓国、台湾、香港）や、ASEAN、中国と共生し、今後も経済発展を維持していくために、九州の生き方として次の３点を提示した。

①これらの国々と地理的に近接し、歴史文化的なつながりも強い九州が、産業技術、科学技術の面において一定の役割を果たしていく必要がある。
②九州の自律的発展のためには福岡、北九州の大都市の位置する九州北部が文化・科学、産業集積のポテンシャルを生かし、国土軸に変わる地域連携軸を形成していく必要がある。
③これまでのような大規模な新都市建設型ではない21世紀型の地域づくりのモデルを内外に示し、ハードとソフト両方の知的インフラの整備によって知的に豊かな地域社会を築き上げるべきである。

●人を中心とした新しいプロジェクトの展開

福岡・佐賀の２県にまたがる７つの拠点地域は、北九州から佐賀に至る既存の都市地域である。それぞれの地域には、それぞれの成り立ちが有り、産業、自然など、多様な個性がある。そして地域では、知的社会づくりに向けた構想・計画づくりが取り組まれ、大学等の知的インフラを生かした地域活性化への取り組みが盛んになりつつあった。

その取り組みの中で、地域の産学公民によって目に見えるコトを起こすことが求められ、この「コト」を起こすためには、「人」が中心となって動くこと、これを支える基盤が必要であるという認識が関係者で共有された。　「知の社会」づくりには、「人」が不可欠であり、「創造的人材」が活躍する場が必要であり、九州北部地域にはこれが不足していた。とくに研究開発のような「人」中心のプロジェクトを展開するためには、地域にどういう「人」が居るのか、その情報を把握することが必要であると同時に、活動を支援する機能が必要となる。さらにプロジェクトのためにはソフト、ハードの両面での資金が必要となり、これを獲得するための機能が必要となる。

このような条件がある中、構想では、推進会議や両県の産業支援、科学技術支援組織との連携によって、様々なプロジェクトが進められてきた。具体的に実現した地域のプロジェクトと

宗像リサーチパーク

しては、宗像地域のリサーチパークであり、鳥栖地域の九州シンクロトロン光研究センター、さらに久留米地域の福岡バイオインキュベーションセンターなどがあげられる。地域と大学との連携への取り組みに関して、ここで佐賀地域の取り組みを少し紹介したい。

●大学の地域連携への取り組み

佐賀市では、佐賀大学を中心として、産学公民による様々な連携活動が行われている。活動の中心は一つの組織ということではなく、NPO、市民、大学、行政など様々な組織がその役割を担っている。地域との連携推進のため、佐賀市の中心市街地であるまちなかでは、商店街の空き店舗等を活用したコミュニティベースでの市民活動との連携活動、街角大学講座などが行われている。また、佐賀駅前の民間と市が共同で建設したビルには、市民活動支援のスペースの一部に、大学による駅前サテライト室が設置され、企業等からの相談窓口が設置されている。ここだけではなく、佐賀大学では、県内の他都市にも社会貢献活動の一環として学外サテライトの展開が行われている。

●サービス化する大学

このように大学と地域の連携活動、知的交流活動は、各地で活発に行われるようになった。この要因の一つとして、学研構想の拠点地域として地域のビジョン策定の過程において、大学等の研究教育機能を核として地域づくりをどう進めていくべきか、それぞれに関わる問題を議論する中で、研究者と地域の人的なネットワークが形成され、大学研究者と行政、地域が一緒に考え、協働で実行するという機会が増えたことがあげられる。もう一つは、大学の独立法人化の動きである。独法化に向けた組織の改革、意識改革への取り組みが行われたことにより、論文や研究の評価だけでなく、社会への貢献、地域への貢献が、業績評価として重視されるようになったことである。その結果、大学人は地元へ目を向け、そして地域は大学開放により、知的資源を活用するという意識を持って大学の中を見ることができるようになった。さらに、大学側での窓口やまちなかサテライトなど相互交流が可能なシステムが学内外に整備されてきていることも大きな変化であり、いわば大学のサービス化が進んできたということである。

構想の立ち上げの当時、大学のサービス化が非常に遅れているという指摘が多かった。つまり、外部から研究者にアクセスする際に、全て個々の研究者・研究室による対応しかなく、なかなか連絡がとれないという研究者も多かった。そういうサービス窓口、サポート機能を確保する事自体が難しい状況であった。また、大学の敷居が高いというイメージは必ず指摘されていた。産学連携、地域連携のための窓口は、学外からの最も大きな要望であった。

●人材を地域にいかに定着させるか

サービス化の次の段階は、地域への人材定着をいかに実現するかという点である。

地域の知的活動をリードする大学人材、企業人材、地域の人材の出会いは、多様な交流の場を通じて行われるものであり、交流が新たなネットワークをつくり、いろいろなネットワークが互いに作用することによって、知的基盤は徐々に形成されていく。これは学研構想という大きな目標を持って地域が推進していく過程で生まれるものであり、一朝一夕で構築できるものでは無い。

しかし、これからも知的な地域社会づくりや知的交流活動を推進していくためには、地域の大学や研究機関、企業、さらに行政・市民など、多くの人々の「知」が集う、結集できる場、機会が必要であるとともに、そういう人々が定着

することが必要である。さらには、国内外の人材の集う場も必要となるであろう。

少子化の進む中、優秀な人材を獲得するため、様々な面で大学間の競争も益々激しくなっていく。地域とそこにある大学との連携が加速度的に進んでいるのも、その一つの表れであり、産学公民の連携は、地域を知的社会に発展させるためには重要な役割を担うものである。国内外の人材を含め、地域に定着してもらうためにはその受け皿が必要であり、誰もが住める、働ける、学べる環境づくりが人材定着の大きな課題となるような気がする。

最後に、ネットワーク型というキーコンセプトは、構想開始の当初は分かりづらいということをよく言われた。しかし、人材を中心とした知のネットワーク、産学官のネットワーク、公民協働のネットワークなど、地域では様々な形でネットワーク活動が存在している。ネットワーク型の学術研究都市は、それらの様々なネットワークが重層的に重なりあって活動している地域社会ということである。それは、地域にとどまらず、国内外、広くはアジアとのネットワーク活動も重なりあうものであり、ネットワークのコアとなる人、組織の存在する地域が要と言うこともできる。

（やまべ　しんいち）

自分が住んでいるまちの安全・安心点検マップづくり

山田　龍雄

私が住んでいる香椎浜、香稜校区（香椎浜１丁目、４丁目）は、東区のアイランドシティの南東側に位置しており、校区に隣接している都市高速～香椎浜入口を利用すれば天神まで約15分、空港まで約20分で行ける交通至便なところです。

香稜校区では、20数年前から分譲マンションが建ち始められました。1990年代の初めには世界の著名な建築家が設計したネクサスワールドという特徴あるマンション群が建てられ、分譲マンションが多い地区です。現在（平成21年８月末)、校区内には約2,073世帯、5,664人が居住しています。しかし、郊外の戸建て住宅開発地と同様に、短期間で分譲マンションが建ったこの校区では、10数年後は一挙に高齢化の進行が予想される地区でもあります。

昨年、この香稜校区で、住民で出来ることは住民で解決するとともに、お互いの住みよい環境や明るい地域社会をつくるため「あすねっと香稜」という自治協議会組織が立ち上げられました。この組織内のひとつのグループとして安心安全部会が設立され、昨年より「安全・安心点検マップ」をつくり始めました。

●部会設立のきっかけは公園での出来事

現在、中心となって活動されている部会長の大竹さんに、安全・安心点検を始めたきっかけについてお聞きすると「以前、公園の物陰で子供が危ない目に遭いそうになった出来事がありました。現地を見に行って、生い茂った草木、見通しを悪くしている旧式遊具、人通りの少ない立地などが危険要因であると思い、行政へ改善要請をしました。行政もすぐに対応していただきました。さらに校区内には他に危険な場所があるので、全て点検し、順次改善していく必要性を感じ、この安全・安心マップ点検づくりを実施しました。」とのこと。

また、住民自身がマップづくりに係わることの意義についてもお聞きすると「住民自身が自分のまちを歩いて点検し、問題箇所を調べることで、まちへの関心が高まるとともに“まちは自分たちの力で変えられる”という手応えを感じ、そこで実際に改善されることで達成感も得られると考えたから、住民参加方式の安全・安心点検マップづくりとしました。」ということであった。

私は「安心安全部会」のメンバーではなかったのですが、大竹さん主催の「まち歩きの会」に参加したことがきっかけで知り合いであったこと、また同じ町内会であったとのことで今回、このマップづくりのサポートをさせてもらいました。私の役割は、一緒にまちを点検し、地図

まち歩きで点検後、熱心に地図の記入している子供たち

上に落とされた意見を整理し、マップを仕上げることでした。

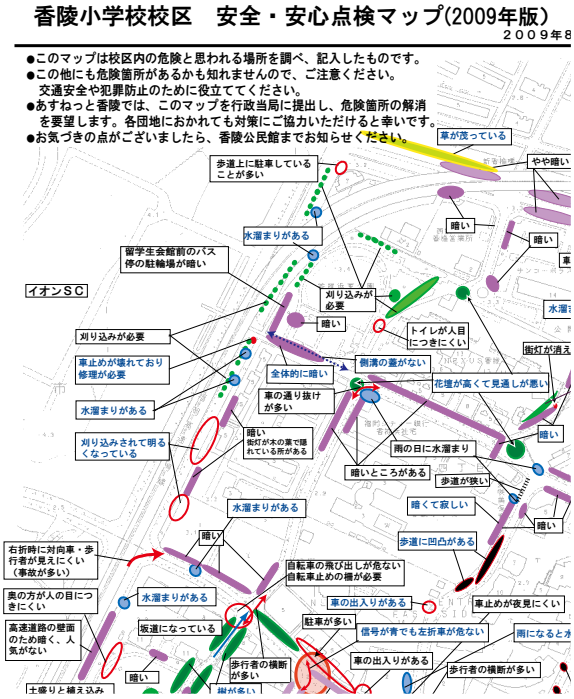
●安全・安心点検マップづくりは子供の視点が必要

昨年の３月２日に昼間 16 名、夜間 12 名（その他事前提出６名）が参加し、校区内を点検し、マップを完成させ、校区内全世帯へ配布しました。

さらに今年は、子供の視線で点検してもらう必要があるだろうということで、ＰＴＡと共催で子供たちに参加を募りました。その結果、７月 25 日に午後９名、夜間 13 名の子供たち（幼稚園から小学生６年生まで）に集まってもらい、３つのグループに分けて点検しました。点検したあと、公民館に集まり、担当エリアを見て回ってきて感じたこと、発見したことを直接、地図上に書き入れもらったり、シールを貼ってもらったりしてもらいました。

少し集中力が足りないような子供でも、ワークショップ形式でシール貼りやペンを握らせ、記入してもらうと、結構のってきて、思いのほか早い時間でマップが完成しました。

マップの黒字が、昨年に大人たちだけで点検した分、青地が今年、子供たちが点検した箇所です。確かに子供の視点でないと出てきそうもない意見として「花壇が高く、見通しが悪い」、「土手の土が流れ、配管の蓋がむき出しになっている」、「いつも通っている交差点で信号が青でも左折する車がある」などがあげられました。子供たちが指摘した「花壇が高い」という箇所



子どもが作った安全・安心点検マップの一部

は、１ｍ程度の花壇に低木が植えられているところであり、大人としてはそんなに高いと感じないのですが、子供の視点でみると確かに見通しが悪いようです。

安全・安心マップは、大人達だけでの視点では見落とす部分があるので、子供たちの視点を入れないといけないと思いました。

●定期的な見直しによる、より安全・安心なまちづくりへ

香稜校区は、新しいまちなので道路が狭い、老朽住宅があるなどといった既成市街地特有の問題はないのですが、完成した安全・安心マップを改めて見てみると、①交差点や団地から車の出入りなどの車の危険性、②道路や敷地内の駐車が多く、歩行者や通過交通の危険性、③防犯灯がない、あるいは樹が生い茂って防犯灯の照度を暗くしている、④公園内には見通しが悪い箇所がある、⑤歩道が狭い、歩道に凹凸があるなど、インフラが整備された新しい団地内でも、まだまだ改善すべき交通や防犯などの安全性の問題があることが発見されました。

このマップは、校区内の世帯に危険な箇所、改善すべき箇所を認識してもらうため、近日中に全世帯へ配布される予定です。

今後、このマップづくりは定期的に見直しを行うことになるでしょうが、私自身、このマップづくりのサポートを行うことで、自分が住むまちが少しでも安全・安心なまちとなっていくことができればと思っています。

また、少しは会社人間から地域人間の地ならしをさせて頂いているようにも感じる次第であります。

（やまだ　たつお）

マイホーム健康診断ＤＶＤ制作
ー「住マイむなかた」居住関連サービス研究委員会の試みー

山田　龍雄

前回の「よかネット 95 号」で、宗像市の市民公益活動団体「住マイむなかた」では、平成 20 年度に①居住関連サービス研究委員会、②元気むなかたハウス研究委員会、③安心賃貸支援研究委員会、④あんしん住み替え研究委員会の４つの研究委員会を立ち上げ、21 年度以降の事業計画を検討していることをご紹介した。

私が係わっている「居住関連サービス研究委員会」では、住まいの簡単メンテナンスのＤＶＤ作成をするということで、今年の４月以降からＤＶＤの骨子についての話し合いからはじめ、６月以降は委託したＤＶＤ制作会社と一緒にシナリオのつめ、映像のネタとなる住まいで傷んでいる箇所や写真などを収集し、８月のはじめに実際の映像撮りを行った。

私もこのようなＤＶＤ制作ではどのような撮影を行うのか、興味があったので、撮影日に午前中だけ野次馬根性で参加させていただいた。

しかし、外野で見るだけの立場だと思っていたのが、宗像市外で市民から顔が知られていないの私だけだったため、急きょ、相談する家の家主役で出演するはめになった。

私が出演した撮影シーンは①玄関先で「住マイむなかた」に加盟している相談員が相談した人の家を訪れ、迎い入れるシーン、②家の座敷で家の補修の相談をするシーンの２カットのみであったが、アドリブの演技も要求され、冷や

マイホームの健康診断
～お気づきですか？
　住まいのトラブル～
ＤＶＤ

家主役で出演

汗をかくと同時に少々楽しませていただいた。

９月の始めに、まだ、ナレーションや音楽が入っていないサンプルＤＶＤが届けられた。

これをみると、やはりプロの編集だけあり、良くまとめられており、なかなかわかりやすい。構成は大きく①「住マイむなかた」の概要紹介、②住まい健康診断のポイント～屋外・屋内～、③簡単メンテナンスの３部構成となっている。最後のメンテナスでは破れ障子の補修の仕方、水道蛇口からの水漏れの修理、壁のクラックの補修という３つの簡単補修の映像があり、非常にわかりやすく、これなら私にもできそうだと思う補修内容である。

残念ながら実際の映像では私の出演シーンのひとつはカットされ、横顔と後ろ姿だけであり、これなら誰でも良かったという感じである。

これからは、このＤＶＤをもって住宅セミナーや住まい相談会などの各種イベントで活用し、先ず「住マイむなかた」の存在を周知し、市民が気楽に相談できるようになればと思っている。

（やまだ　たつお）

JSURP 福岡支部
第１回まちづくり勉強会　報告
「現代風水とまちづくり」

本田　正明

事務局をお手伝いさせていただいている都市計画家協会福岡支部で、初めてのまちづくり勉強会を開催しました。講師をしていただいた吉村徳則氏は、広島市で経営コンサルタントとして、商業施設の開発やまちづくり計画に携わりながら、現代風水研究会の代表をされています。

テーマの「現代風水とまちづくり」は一見すると、風水といえば占いみたいなもので、まちづくりはあまり関係なさそうに思われるのですが、中国の古代の都市づくりに風水が活かされるなど、実は深いつながりがあったりします。

高松塚古墳の壁画で有名な四神相応（青龍・白虎・朱雀・玄武）は、住むのに適した環境を表しており、北（玄武）にどっしりとした山に支えられ、東（青龍）と西（白虎）の山に守られ、南（朱雀）に海・湖などにある土地が良い条件なのだそうです。中国の紫禁城（故宮博物院）も風水の条件を満たすように、北側にわざわざ人工の山（景山公園）をつくったのだそうです。

京都の平安京も代表的な風水の都市ですが、もともとは北部にある船岡山を北の玄武として都市設計が行われたそうですが、1200 年もの歳月の間に、右京区が寂れたり、応仁の乱などの影響で御所が移動するなどにより、現在は中心軸が東へずれてしまっているという話は、都市の成り立ちを考える上で、とても興味深いものでした。

また、話はがらりと変わって、風水などとまったく縁のなさそうな現在の大型商業施設でも、風水を意識した施設配置が行われていたり、子どもの毘沙門天をさりげなく置いているなどの事例を紹介していただきました。

講演後の質疑では、参加者から「風水では色の要素が重要なのでは」といった質問があったのですが、先生の話では、「風水で一番重要なのは地形」なのだそうです。よく考えてみると、現代も安全で安心して住める場所選びの基本はまったく変わらないような気がします。部屋の間取りや配置を気にする前に、まずは自然災害などの影響を考えた場所選びが重要なはずです。風水とは、人間の生活環境選びの基本的なルールを教えてくれているのだと感じた勉強会でした。　（ほんだ　まさあき）

四神相応の図（現代の風水ガイドブックより）

講師の吉村氏

３年目の糸島まるごと農学校

本田　正明

糸島まるごと農学校の事業も今年で３年目。地元農家の方々や役場の人たちとともに、環境赤米づくりの「コメ道場プロジェクト」と「野菜づくり実践講座」の２つに取り組んでいます。コメ道場では、今年も休耕田を活用して赤米で文字アートをつくりました。９月に鑑賞会では、山側の田んぼの赤米の色つきが少し遅れるという問題はあったものの、天気は晴天に恵まれ、玄界灘と赤米の棚田を一望できるやぐら台には

参加者の種植えの様子

野菜づくり講座の講師である二丈町農家の加茂さん

多くの人が訪れていました。

野菜づくり講座は、講師の先生として加茂さんという新しい農家に協力してもらい、昨年ニーズの高かった種植えから、一緒に取り組んでいます。参加者は20代から30代の女性グループや50代から60代の夫婦が多く、40代は仕事が忙しい世代なのか、あまり見かけません。これは、市民農園などの参加者でも同じ傾向のようです。

毎回40名を超える参加があるのですが、半数を超える方々が野菜づくり未経験者です。中には、昨年つくった野菜の味が忘れられなくてリピートしてくれた方もいます。農や食に関する講座が数多く行われる中で、糸島まるごと農学校を選んでもらえるのは、やはり実際に自分の手で野菜を植えるところから学べることが大きいようです。

野菜づくりでは、習った通りやったつもりでもうまくいかないことと多々あります。土がよくなかったり、植える時期が悪かったり、品種

やぐらからは田んぼと玄界灘も見渡せる

の選び方に問題があったり、肥料をやりすぎていたりと原因もさまざまで、実際の畑の状況を見なければ、原因を特定するのは難しいものがあります。

農に興味を持ってくれた人たちが、最初の失敗によって「やっぱり自分には野菜づくりはムリ」とあきらめてしまわないように、少しでも成功体験を積んでもらおうと、徹底して農作業初心者がつまずきやすいポイントを丹念にわかりやすく説明できるようにプログラムづくりを心がけています。

今年は、初めての取り組みとして、以前から要望も多かった種植えから参加者に作業をしていただきました。コーティングされたレタスやブロッコリーの種そのものをみるのが初めてという人も多かったようです。5000粒入ったケースで5000円という先生の説明で、参加者はみな驚きの声を上げていましたが、一粒1円で発芽率がほぼ100%だということを考えると安いと思います。自分でも試してみようと、種のケースをデジカメで撮影する人もいました。

実際の種植え作業も簡単なようで、わからないことがいろいろあります。「コーティングの種だから覆土（ふくど）をすると発芽しませんから気をつけてください」といわれなければ、きっと種の上に土をいっぱいかけていたでしょう。また、料理のレシピのように、農家さんごとに特色あるアレンジがあって、今回の先生は種の上からもみ殻と米ぬかとEM菌でつくった“ぼかし（肥料）”をかけていました。農業にはけっこう専門用語も多く、ぼかしという言葉を

わからない人も多いなど、理解に偏りがあると思われるので、今後、座学の時間などを使って、復習や説明を加えていきたいと思っています。

（ほんだ　まさあき）

オチコボレの戯言・その４

“自分自身の経営”を他人に頼むのか

――自分に向いた職業を考える

ゆとりがない時代に生きたしあわせ――

糸乗　貞喜

●方針が分からなくても、何か動いてみる

高校１年になった頃のクラス会では、「生きるために食うのか、食うために生きるのか」などといったテーマで議論を続けていた。みんな元気に詭弁を弄していたが、しかし私の腹の中の本音は、「どうしたら生きていけるのか、どうしたら食べていけるのか」だった。

最近、事件を起こした若い人（犯人）や、派遣切りで失職した人が「自分に向いた仕事が見つからない」などといっているのを、テレビなどで見ると不思議な気がする。幸いなことに私には、「自分にあった仕事を見つけて、自分の能力を生かしなさい」などといってくれる先生も、親兄弟もいなかった。「とにかく早く自立しなければならん」ということだけが目標だった。現代のように、派遣などという便利な仕組みもなかった。セーフティーネットなどという格好のいい言葉もなかった。

とにかく、親戚でも友人でも、ちょっとした知人にでも世話になって、食うための仕事に食らいつくことが第一だった。そして、少しは役に立つと認められることがすべてだった。「自分はどの仕事に向いているのか」などと迷うような、幅の広いゆとりはなかったように思う。

最近、オチコボレ人生の年貢納めの意味で、その頃世話になった人のところへ、気に入っているイモ焼酎を持って、私の葬式（死んでしまう前にお礼を言っておく）のつもりで会いに行っている。その気分になったときに、最も強く浮かんだ顔が、若い頃の３年間に世話になった人の顔であった。これらの人たちは、世話をしてやるという感じではなかった。しかし、押しつけではないが少し包むような気分で、厳しい仕事の仕方で、平常な付き合いとしてのサポートをしてくれた。この頃の貯金は50年間使えた。

後になって会社が倒産したときだとか、みんなが勝手なことをいってバラバラになり、赤字と借金で見通しが立たなくなった時や、人の作った借金を背負ってやらざるを得なくなったときなどでも、バタバタせずに立ち向かえたのも、若い頃の貯金の所為である。

●私の人生で、最大の基礎的気力・体力貯金をした三年間

高校を卒業した年の３月から、変な道に入ってしまった。理由は、自分の将来についてのイメージが持てなかったからである。半年でその道が溶解してしまったが、誰もサポートしてくれはしなかった。やむなく勘当されたオヤジの元へ帰ったが、家の百姓仕事といっても、自分のするべき仕事はない。友人の薦めで土方仕事に行った。

秋の終わりに、和歌山のミカン農家の出稼ぎ仕事に行かないかと、中学時代の同級生に誘われ、行くことにした。オヤジには「オマエみたいな者が、他人の飯を食って、やって行けるはずがない」といわれたが、それで一層行く気になった。紀州のミカン農家では、当時はすべてのものを天秤棒で、肩に載せて運んでいたので、確かにきつかったが、それだけのことである（ミカン畑にモノレールが付いたのは、かなり後のこと）。

どちらかといえば、「ヤツ飲もら」といって朝と午後のヤツ時に茶粥を飲むのに驚いた。和歌山の茶粥は飲むもので、食べるという概念には当てはまらない。とにかく腹が減って困った。「他人の飯」という意味では、その家の小・中学生ぐらいの子の家庭教師のようなことを、夜になってからやっていたので、きついと思うこともなかった。一応、肩・腰・脚の訓練にはなった。このときの稼ぎが、後の大学の入学金の一

部になる。

次の年の３月に里に帰って、４月頃から山の材木を下まで運ぶ、いわゆる“木だし”に使ってもらった。このボスは遠縁のセッチャン（哲夫）で、彼は男気と、力と、優しさを持った、８歳年上のいい男であった。だがこの仕事は優しくはなかった。材木をトラックの着くところまで出すといっても、下りばかりではない。木馬（木の橇の上にたくさんの材木を括り付け、そのうちの一本にワイヤーを回して、ハンドルとブレーキにする）は下りにしか使えない。もちろん搬出の機械などは全くなかった頃のことである。登りの部分は、すべて自分達の肩で担いだ。

初日の朝から、下着が真っ赤になり、肩にへばりついた。もちろん当て布をしていても血はにじみ出してくる。夕方帰って下着を剥がし、風呂にはいるときの痛さといったらない。しかし翌日の朝の仕事の取りかかりの時には、それ以上に痛い。内出血で、大体２、３センチぐらいは腫れていたと思う。これも４、５日か１週間すると、固い筋肉になったような感じで楽になった。このころ、日頃から重労働になれている人に、それなりについて行けるという自信がついた。今から考えると想像もつかないぐらい大きいドカベンを持って半年あまり山に通った。本当に楽しい日々だった。

この頃、焼酎をおぼえた。夕方、山から里に帰ってくると、よろず屋みたいな店に入って焼酎を飲んだ。今の人には想像もつかないと思うが、焼酎は強烈な“臭い”がしていて、鼻をつまんで飲むような、単に酔うためだけの飲み物であった。それを飲むコツは、チビチビ飲まずに息を止めて一気に飲む、ハードボイルドな感じである。今の焼酎には“香り”があるから、そんなもったいない飲み方は出来ない。

その年の秋、叔父や大阪の従兄に勧められて「大学卒という者になろう」と思うようになるのだが、それは大学にはいるためのお金を持っていたからだと思う。とにかく私には“ツキ”があった。その後大阪に出て、働きながら受験勉強をした。高二ぐらいから受験勉強的なことはしていなかったので、上手くやれたわけではない。

高卒後三年間は、はじめの半年はひどい状況だったが、全体として考えると、我が人生の最高の備蓄期であった。３年遅れで大学に入ってからも、冬などに、ふる里のスキー場を訪れたりすると、スキー小屋をやっているセッチャンや別の従兄などと、誰もいなくなった夜中のスキー場を見ながら、ダルマというウイスキーを飲み、島木健作論をしたり、農村の将来論をしたり、興がのるとスキー場に出て行って、その頃出始めたばかりの雪上車で走って転げたりした。あのとき雪の中で寝てしまっていたら今生きていないことになる。

このころの蓄えが、「オレは肉体労働でも食える」という自信の元になっている。

●自分の適職を見つけることなんて可能なのか

私は積極的ではなく受け身な性格である。巡ってきたときの役割や運命を受け入れて、一応「逃げるわけにはいかないなら努力をしよう」といった感じで仕事をしてきた。自信があったわけではないが、それで何とか会社の再建が出来たり、赤字体質の会社の転換が出来たりした。

若い人に言いたいのは、自分の「適職を見つけた気になれる人」なんて、ほとんど居ないだろうということだ。死の間際にでも分かればいい。目標設定を「適職を見つける」に置くのは、適切な態度ではない。なぜならば、適職かどうかの検証を“何時、どんな方法でするのか。死ぬまでにすることは可能なのか”が分かっている訳ではない。私の目標設定は「食っていく」ということだった。二日目にクビになった仕事は営業職だったが、とにかくやってみようという気分でいた。

クビになったあとで、友人が紹介してくれたのは編集屋だった。とにかく「食っていく」ベースが出来て大安心だった。最近その友人のところへ焼酎を持って尋ねた。

私は自分の適職なんて分からないが、一度も転職をしたことがない。最初が編集屋で、次は

土建屋の番頭（現場監督など）をした。二年ほどして、子供が二人いる四人家族で、計画屋だかコーディネーターだかという、まだ世間で認知されていない商売に変わった。普通の感覚でいうと、こういう態度を無謀という。しかし、この会社で食わねばならんから、社会保険などを入れて、続くように努力したことは、オチコボレ自覚の項で述べた。

よく考えてみると、ずっとコーディネーターという商売の枠の中にいたことになる。編集屋も土建屋も計画屋も、人の協力を得て、物や考えを集め、組み立ててまとめ上げて「仕事にしていく」ことに替わりはない。

九州に来てしばらくした頃、どんな仕事をしてきたかを聞かれたとき、「考えてみるとコーディネーターから一度も出ていない」と返事をしたら、「コーディネーターで一番気をつけたことはなんですか」と聞かれた。「たくさんの問題や人々の調整をするわけですから、人によってだとか、物によってだとかの差をつけないことと、人の話をよく聞くということでしょうかね」と答えた。つまり、あまりにも気働きをすると言うよりは、淡々と聞いていくことだと思う。

こんな次第だから、私の適職論などはいい加減だ。つまるところ、就職の時の態度なんてアソビ半分でいいのだ。子供が遊ぶときに、「一番楽しいアソビは何か」なんて、遊ばずに考えている子供がいたら、頭の神経がおかしくなっている。とにかく、自分にめぐってきた仕事を、面白おかしくやるにはどうすればいいのかと考えて、仲間と協力していくしかない。

話が変わるが、その後 10 年か 15 年すると、地域計画・まちづくり・農村計画・コーディネーターなんぞという商売の経営者になっていた。もともと、こんな商売があることさえ想像したこともなかったのに。そのうちに、私にとってかなり苦手な、採用する側に回ってしまった。そこで私のとった態度というのは、私どもの会社を“若い人たちに採用していただく”側にまわることだった。来きてくれた若い人を前にして、我々の仕事はこういう点でおもしろいが、こういうところはつらい等、面接時間の 2/3 以上は私の側の説明だったと思っている。「この会社はイヤなことはしなくていいんだ」「仕事はしなくても給料がほしいなら、払えるうちは払うよ」「イヤイヤな態度でした仕事はクライアントに失礼だし、イヤイヤ生きる人間がいるのは気分が良くないから」とか、「おもしろい仕事がしたいんだ」「こんな仕事、好きになれそうですか」などと、延々と尋ねた。そして最後に「自分自身の経営をするのは自分だよ」といった。

こんな無責任な経営者だったので、相手が私の会社を「採用したい」という態度の時は、出来るだけ断らないようにした。もちろん当方の良くないところをたくさん説明して、それでも「やってみる」といえば採用した。

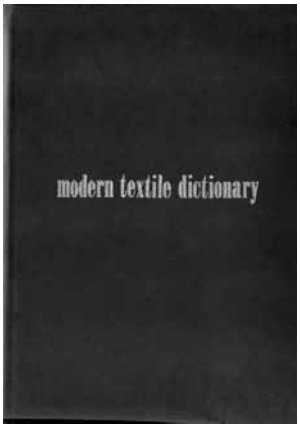
こんなにまで考えても、他人の適性を見分けるということは出来ないものだと思った。

●倒産会社は最高の経営学校――最初の倒産体験と再建のプロセス

仲間の中での協力の仕方で仕事のスピードも、品質も変わるという経験をしたことがある。

27、8 歳の頃、最初に（本当は大卒後二度目だが、実質は最初）就職した会社がおかしくなっていた。倒産ということは収入より支出が多いと起こる。これは個人だろうと、家庭だろうと、全く変わらない。資金繰りが難しいなんていう人がいるが、収入より支出が多いと困るわけで、利益を出し続けると資金余裕が生じる。また、明らかに利益を出し続けているという信頼があれば、誰でも必ず貸してくれる。やりくりで会社が運営できるという、変な妄想にとりつかれなければ健全経営が出来る。私が最初に遭遇した倒産は、資産状況と経営投資のバランスが壊れていた、

倒産が近づくと、大体目先の利いたヤツから出勤日数が減っていく。ほんとかどうか知らんが、沈没する船からはネズミが逃げ出すと言われていることと同じだ。また、我が部門は儲かっていると思っている連中は、その部門で独立し



繊維事典の表紙

ようとする。結局半分余の連中が個別にやめていったり、別会社を作ったりして出て行った。残ったのは、目先の利かないどこにも就職できそうにない 12 ～ 3 人の連中である。一応労働組合があって、管理職になっていた私に「こんなことになったんだから、もう一度組合に戻って委員長になり再建の中心になってほしい」という申し入れがきた。私も異存はなかったが、27、8 歳の私に見通しがあるわけではない。元の経営者（理事長）がいい人で、繊維業界新聞社の社長に協力を頼んでくれた。新社長の条件は「会社になんの資産もないのだから、雑誌の発行権と、出版準備中の繊維事典、それらの受け継ぎ、業務進捗のための協力」であった。

このとき私が考えていたのは、「取り残されている連中が食っていけること」で、それが可能ならどんな条件でも受け入れて、我々の業務の受け継ぎには協力する気でいた。新社長は吉村さんという人で、その後私が経営者になっていくに当たって、師匠だと思った人である。もう一つの好条件は、担保とされている雑誌の編集に私も関与しており、一方の繊維事典は、私が責任者となっていた。新社長は「仕事さえ進めてくれるなら、今までの給与を保証してすぐに払う。だがいずれは給与体系については協議して自分の考えも入れたい」といった。もちろんそれにも異存はなかった。（この繊維事典はＡ５版、７ポ組、本文 948 ｐ・付録マニュアル 248 ｐ、定価 5300 円、もちろん日本語）

今度は組合員に対して私が説明する番だった。現在の会社の経営状況を懇切丁寧に説明した。そして新社長との折衝の内容を説明した。そして私はそれを受け入れるつもりだから、全員一致協力して働いてほしいといったら、全員安堵の表情を浮かべた。これにはすこし裏事情がある。まず一つは、私が学生時代に吉村社長の新聞社で校正のアルバイトをさせてもらっていたことがあったので、そのルートで私の評判を聞いてくれていたことがある。もう一つは、前の会社の理事長が、私を高い評価で吉村さんに売り込んでいてくれたことである。

適職などを考えるより、アルバイトであろうと、気分よく働いていることが、どこかで役に立つ。いずれにしろみんな安心したわけだが、もう一つ大事なポイントがあった。

●意識共有体験―危機感を共有して協力しあえば何かが起こる

どこの会社でも、組織でもいろんな人がいる。何を頼んでも、一言イヤミをいう、自分は忙しいんだという、誰の仕事なんだなどといって、すぐには動いてくれない。悪気があるというわけではないが、ワンクッションもたつくというような人もいる。こんな人は、逃げ出すネズミにはなれないので残っていた。私より 10 歳ぐらいは年上だったと思う。だが人間は“化けることの出来る動物”だと悟った。

私は全員に経営状況を説明したときに、「これからは人手も減ったし、仕事、得意先を大事にしなければならんから、全員がお互いに気配りをして、どんな仕事でも全員で当たる気持ちで協力してやっていこう」といったのである。すると 40 才さんが、それをすぐに実行しはじめだしたのである。彼は販売担当だったのだが、「糸乗さん、一応私の仕事は片づいたのだが何かすることはありませんか」といってきた。糸乗クンがサンに変わっていた。さらに私が「あなたの仕事の状況整理を書いてみてくれませんか」といったら、次の日にそれが出てきた。それを見ながら「今後の販売計画の下書きをしてみてくれませんかねえ」ということになった。一挙に能率は数倍。

腕力だけが勝負というような仕事ではなく、

段取りやアイデアを生かすことが可能な仕事の場合は、労働生産性は人によって数倍の差が出ると思っている。この時の彼は以前の３倍ぐらいの仕事を仕始めた。そして以前より遙かに楽しそうである。その後チョクチョクとアイデアや企画を言ってきてくれた。となると、ほかのメンバーも元気になるし、職場の空気も良くなった。ガンになるかもしてない部分が星になった。出入りの印刷会社の営業の人なども「事務所が、倒産後の方が楽しそうですね」などといった。

この会社には、上司＝先輩が３－４人いた。社長が私を良く用い過ぎるように感じたので、会社の再建が軌道に乗り、私の受け継いでいた仕事のケジメも付いたので辞めようと思った。それで、同僚を誘って二人で社長の家に行って、当時見たこともなかった“大砲”というブランデーを出してもらって、全部飲んでしまって、ゴチソウサマだけ言って帰った。後日、社長は「あいつらは遠慮と言うことを知らん」といっていたようだ。数日して、私は退職を申し出た。全員から反対意見が出て、大いにもめたが、「再建が軌道に乗るまでガンバッテくれたんやから」といってくれる人が出て収まった。その後、今から30年前ぐらいに、私も外国に行ける世の中になって、ナポレオンの大砲を買って帰った。何となく今でも置いているが、何時死ぬかも分からん年になっているので、早く片づけねばならん。

私は「知的サービス業」の生産性は、人によって十倍、百倍の差があると思っている。たとえば、囲碁・将棋のプロは一瞬に何百手の先を読む。ところが私は、次の一手が分からない。プランニングの仕事もよく似ている。仮説→検証→仮説→検証というプロセスをとる場合、本筋の仮説のヨミに何時入るかで百倍ぐらいはすぐ違う。かけ算で違うのである。

仕事の量と質＝ネタ×カン×気働き

私は、問題に対するとらえ方・取り組み方については指示しないことにしている。ひょっとするととんでもないやり方を考えるかも知れない。その機会をつぶすのはもったいない。しかし仮説がなかなか出ない時は、相談してくれるようにいっている。確率の高い仮説から取りかかるのが当然だから。

●ハラをくくらねばならないときもある

「最低賃金を1000円に」というスローガンをよく聞く。「そんなことをすると日本のモノつくり産業と中小企業が全部つぶれる」という意見と、「それは先ず上げてから考えないと、賃金上昇は進まない」という革新という形容詞で呼ばれる超保守思想に凝り固まった政党などの意見がある。

実は私も、1975－80年頃にそんな経験をした。オイルショックのあと、物価が暴騰し賃上げ要求が高まった。その頃私たちの会社は40人余りだったと思うが、組合が賃上げだったかボーナスだったかの要求を出し「団体交渉をしたい」と申し入れてきた。「団体交渉ということは団体と団体の間の交渉ということだから、組合の委員長と私だけでいいんだな」というと、「イヤ、社長だけと、組合員は全員だ」という。つまり大衆団交スタイルの要求だ。この頃は、みんなが“タイセイ内人間”になれたような気分が支配していた。

30％とか50％ぐらいの賃上げだったか、大幅なボーナス要求だったか、よく覚えてはいない。そこで社長は「みんながそれがいいと思うなら、いいことだと思う」といってしまった。とたんに騒然となって「おー、最高責任者がみとめたぞ、賃上げだ！！」ということになったらしい。「いいことだと思うといっただけで、それでいいとは言ってない。みんなの考えを生かすのが民主主義だと思う。」ということらしかったが、「いいと思うことをなぜしないのか」という話から先には行かない。しばらくすると組合幹部が私に連絡を取ってきて「しかじかということになったが、本当に大丈夫ですか。みんなは、ヤッタと思っていますよ」といってきた。社長が当事者の立場に立つ人だとは思っていないのだ。「君らはその要求を出したんやろ。社長と意見が一致してよかったねえ」と客観的に返事

をした。この件で社長からも他の役員メンバーからも、私に考えをいってくるものはなかったように思う。「さてどうするか」と考えていたら、また組合役員がやってきた「我々は、すぐに要求をのむ話になるとは思っていなかったんですが」という。私は腹をくくって、とりあえずの資金繰りは出来ると考えていたので、リスクはあっても受け入れる気になっていた。「社長が言ったことが守れないようなら会社なら潰れた方がましだ。まあやってみよう。方針をちゃんと出すから、全員協力してくれ」と返事した。

記憶違いがあるかも知れないが、これを機会に、当時壊れ始めていた原価管理を立て直して、全員のモチベーションを上げようと思った。コンサル業の原価管理システムは、最低で三年経たないと完結しない。何とか経営の立て直しをして、けじめがついたら会社を止めよう、と思った。

●オープンな経営こそが、これからの情報化社会に対応

パソコンの整理をしていたら、古い決算報告のメモが出てきた。「㈱よかネット　第15期決算報告（960527）……〈営業活動〉全員で取り組むということで活動を始めています。その内容は、毎月「よかネット」や「ワンポイント・ナウ」「よかネットミニ編集」を持って全員で訪問活動をすることです。　一方ネットワーク強化のため、６月には講演会、パーティを企画しています。また「よかネット」の編集方針においても、実際に仕事に密着したものということで21号から変え始めています」と書かれている。
たとえ零細企業であっても、株式会社のルールは守るべきであると考え、形式を守るという意味も含めて株主報告をやっていた。そのあとで、従業員も一緒になってご馳走を食べに行き、交流をしていた。これは株主は第一級の営業マンだと考えていたからである。もちろん従業員は一層大切なので、同じ内容の上に、次期以降の見通し、仕事の仕方の説明などをした。

決算報告の中のことを少し説明すると、編集内容として「実際に仕事に密着したもの」と書いているのは、仕事で得た知識や仕事で使えそうなヒントは、出来るだけわかりやすく発表していくということだった。これがオチコボレ企業の態度であり、情報化社会の方法であると思っていたのである。確かに、「自分で苦労して得たノウハウをこんなに発表してしまったら、みんな使われてしまいますよ」といってくれる人が２、３人いた。

それに対しては、「我々のような小さい存在は、リスクなど気にせずにどんどん出していくことで、クライアントに認められる機会を増やすしか途はないのですよ」と返事をした。情報やアイデアというものは、特許はとれないし、自分で思いついて心の中で思っていても誰も認めてくれない。認められないかぎり評価されないし、この会社に「こんなテーマでやらせてみようかな」「ヒョッとすると、もっと別のテーマも持っているかも知れんから企画者を提出させてみよう」などということも起こらない。

私の感じでいうと、二つの理由で「アイデアを取って使われる」ということはなかった。先ずひとつは「こんなちっぽけな会社のこんな程度のヤツらの書いたものに、まともな評価の出来るレベルのものがあるはずはない」と思われていたことである。もうひとつは、「この連中の方法論（取り組みの考え方）を使って自分の仕事のデータを作ってみよう、とか、もっと発展させてみよう」などと考える人はいなかった。全くなかったわけではないようだが、その考え方を使って自分のデータなどを作るのではなく、丸写しのコピーが無造作に載せられていただけである。「データつくりを楽しむような人はいない」というのが感想だ。

この年は、私が㈱よかネットを引き受けてから10年余が経っていた。赤字を解消した上で、この頃にはかなりの資金余裕・営業ストックも出来ていたので、関西人の私が続けるよりも、九州出身の所員に社長を譲る気でいた。それには、「人の能力には差はない」「会社経営は体力でやるもの」という信条を持っていたことが影響していると思う。

●原価管理の意義は、危機感の共有と協力の気分を育てること

私の人生は、超弱気の連続であった。「オレについてこい」といえるほどのことが出来るはずもなく、重苦しいような気分にならないように気をつけた。ひとつ一つの仕事ごとに原価管理をしたが、それをネタに文句をいったり、ハッパをかけてりしたことはない。私自身がいわれるのが嫌だから、みんなにもいえない。超弱気で通した。

この考え方の原点は、27 歳の時の倒産体験である。再建過程で、誰でもその気になれば２～３倍の力を発揮する、ということを感じていたからである。知的サービス業の場合は「超弱気」こそが、企業の活力源になると思っている。

そういう意味で言うと、倒産会社というのは、「逃げ道はない」という意識の共有が出来たら、意外に再建しやすい。知的サービス業の生産性を決めるのは、「意識と協力」だからである。

経営の危険度を全員が共有するためには、信頼のおける状況分析がなければならない。意識共有のベースにはデータが必要であり、原価管理を不可欠とする。しかし誰しも、状況がはっきり分かると、自分に対するマイナス評価が、みんなに曝されるのではないか（特に高学歴者はこれに弱い）という不安を持ち、猛烈に抵抗する。

最初の原価管理は、昭和 44 年（1968）頃に始めた。管理というと上司が細かくチェックして、締め上げることのように受け取る人がいるかもしれない。小企業はゆとりがないので、手間をかけるわけにはいかない。つまり、経営管理の原点は、自主性の尊重＝メシを食うという目的のためにマネージメント（上手くやる）である。が、私はもう一つの目的を持たせた。それは、税務署の一方的な判断による課税から、私なりに会社を守ることである。

我々の仕事は、三月末の契約納期ということがほとんどだ。税務署は、契約書の期日で決算をするように言ってくるし、税理士は基本的には税務署のお手伝い係なので、節税などは奨めない。私が考えたのは三月末は未完成だとして（実際もそうだ）、次年度決算に回すことである。そうすると、それらのお金は資金繰りに使うことができるし（もちろん未支出分だけ）、利益が出ている仕事は納税を一年遅らせられる。

しかしそれには、税務署員を納得させるだけの資料がいる。そこで考えたのが、“一挙両得法＝仕事別原価台帳で経営管理に使う＋税務署に対する説得資料にする”である。今になれば、パソコンのキーを一度押すだけで済むが、当時はあらゆる経費に仕事名を書かせ、就業台帳には仕事別に時間数を書かせてので、若い所員は素直に従うが、古い所員や役員がサボって困った。それに対して「税務署がうるさいから……」といって、みんなを説得した。

一方で、税務署には「これは元帳とは関係のない内部資料で、仕事の把握と品質ＵＰのために付けているのだが……」といって、契約期日に仕事が終わっていないことの証明にした。つまり税務署員には、「内部帳簿まで見せているのですよ」という態度で説得したのである。

オイルショック後の不況期に、とにかく資金繰りが乗り切れたのはこの御蔭だと思っている。コンサルタントの経営者仲間で、税務署の不満を言う人に出会うたびに、私の方法を説明し、帳簿見本を渡し、「経理の担当者に説明させるから来させなさい」と言っても、誰も来なかった。もっとも、会計学博士とか、公認会計士が言ったら信用したかも知れない。一介のオチコボレ経営者のやっていることなど信用はできない。しかし、税理士や会計士は国が損をするかも知れないことは言えないのである。経営者が自分のリスクでやるしかない。それはみんなイヤなのだ。

もちろんアルパックＯＢが経営する会社は、この会計方法しか知らないし、効用も分かっていたので、同じ方法をとってはいた。

●良い仕事とは、“面白いこと”と“仲間と楽しく”

高校卒業後の三年間は、オチコボレ街道を歩いていたが、その間に「いざとなったら肉体労

働でも食える」という自信をつけた。ここには書かなかったが、大学生ということになっている間は毎日アルバイトをしていたのだが、与えられた仕事は出来るだけ工夫しながらすることにしていた。その効果は、アルバイト先が安定（固定化する）すると同時に、ある程度休日の取り方でも融通が利くようになった。仕事先にとっては、段取りのいい人間の方が、遙かに賃金効率はいい。アルバイト先の評判というのが、私をずいぶん助けてくれた。

現下の日本の経済状況からいうと、日頃私がオチコボレ論で言っているように、労働マーケット世界が広がっている。その条件下では、筋肉労働や規格が一定した労働の賃金は、日本より何倍も低い国に合わせざるを得ない。日本独特の効率的な労働の仕組みを考えても、そうは何倍も変わらない。

現代の日本が直面する世界の労働マーケットは、1970 年代の日本とは違う。その頃の日本と似たような状況にあるのは韓国や中国である。これとて 10 年後は、同じ条件では国民が許してくれない。

今後の日本は、否応なく知的高級品製造、ココロを楽しませる商品開発（ファッション産業も）、高度・高価格なサービス業（アジア全体を対象にした医療・福祉・観光）でないと現在の高賃金は支えきれない。

最後に一つエピソードを書いて終わりにする。

私どもの会社は、新入社員歓迎会の企画運営は、その年の新入社員にやらせることにしていた。指を折って考えて見ると、事件が起こったのは 1980 年代の初めだったと思う。大卒以上が多いので、25 才ぐらいで新入社員だった。戦後 10 年以上たって社会が安定した頃に生まれた人たちである。

予算と行程をいってきたので「それでいいよ」と返事をした。少し質問すると要領を得ない。確かめてみると、全部丸投げで旅行会社に頼んでいたことが分かった。「安くていい旅行が出来る」という理由らしいが、これには驚いた。少なくとも大学・大学院を出て、プランニング・企画系の会社に入ってきた連中が、自分で企画できるという状況を楽しもうという感覚を全く持っていなかったのである。

あまりにも違和感を感じたので、当時参加していた技術・研究開発系のボス連中の交流会（関西の大手企業の研究所長、技術開発部長クラス。その中で私だけが小企業の文系人間）で話してみた。ところが「その方が安くていい旅になると、思ったんじゃないですか」といわれてがっくりきた。日本の企業環境が、チャレンジ型から達成安堵型へ変わりつつあるように思った。今から考えてみると、日本は戦後 40 年経って潜在的には、下り坂にさしかかりつつあったのかも知れない。

1985 年頃というのは、転換期の時期だったのだ。それ以後というのはバブルと次世代へのツケ回しの連続で、物質的には贅沢（ココロは貧困に）をしてきている。最近の政治家の「景気対策」とは、新しい時代にあった産業に取り組むことでなく、“次の世代へツケを回すこと＝子や孫のスネを囓って生き血を吸うこと”らしい。テレビを見ていると、そういった悪相の政治家ばかりだ。　　（いとのり　さだよし）

〈再説明〉オチコボレ論は分かるが、言葉の整理が不十分だという批判を受けます。特に対語の「レギュラー」がおかしいといわれます。補欠はどうなるんだ、というわけです。確かにその通りで、「オチコボレ人間：タイセイ枠人間」とすることにします。ついでにいうと、この対立枠は固定的ではありません。フランス革命やロシア革命の例を挙げるまでもなく、運命が転換する（革命）ことなどはいつでも起きるのです。「社会体制の枠が壊れるとき」がきたら、放り出されてしまいます。“派遣切り”は「仲良く国内でモノツクリ、輸出で日本だけもうけよう」という仕組みが、労働市場の国際的拡大（５倍化）で壊れてしまいました。言葉の整理は以下の通り。

体制枠人間

…インサイダー、体制社会内で暮らす人、
　枠組み内人間、系列、地縁、縁故、宮仕え、身内

オチコボレ

…アウトサイダー、社会体制からはみ出している人、
　体制枠外人間、無宿人、はみ出しもの

＊次回は、今月に書く予定だった京都現代美術館・何必館のことなどを、この夏二度行ってきたので紹介します。何必とは＝定説「なんぞ必ずしも」ということです。

うまいものはうまい
折尾の美味しい餃子屋「兄弟」

山田　龍雄

折尾地区は北九州市の西端に位置し、地区の中心にあるＪＲ折尾駅は鹿児島本線、筑豊本線が交差する交通拠点であり、毎日約3.3万人の乗降客がある。この折尾地区では将来のまちづくりに向けて鉄道高架、幹線道路の拡幅、土地区画整理事業といった事業に取り組んでいる。この折尾駅周辺の商業活性化に関する仕事のお手伝いしており、昨年の10月ごろから、調査や打合せで折尾にたびたび行く機会がある。

現在、駅周辺では道路の拡幅や駅北口広場の整備に伴い、駅北口側では店舗や家屋が移転しており、お店の数も年々減ってきている。これらのお店の移転も少しは影響しており、折尾駅周辺にゆっくり食事できるお店が少なく、昼間の食事場所を決めるのに苦労する。

そこで、仕事の打合せ後、「どこか折尾周辺で美味しいところはありませんか」と尋ねたときに、紹介していただいたお店のひとつがこの餃子屋さんである。

お店は、折尾駅東口から南側に流れている堀川沿いの飲食街の一角にある。店構えは間口３間、奥行き５間と小さな店であり、料理場側のカウンター６席、壁側に取り付けられたカウンター６席で計12席しかない。

ここで餃子をつくっているのが中国人のご夫婦である。14年前からここで餃子一筋で頑張っておられる。主に奥さんが餃子づくり、旦那さんの方が料理担当である。調理場側のカウンターに座ると、奥さんの２個同時皮づくりの早業が見られる。

私も７年前ぐらいにハルピン出身の中国の人からハルピン餃子を伝授されたことがきっかけで、我が家の餃子は皮も手づくりとなった。それは手づくりの餃子でないとモチモチした食感が味わえなく、市販の餃子は食べる気はしない。また、美味しい餃子屋があると聞くと、是非、一度はお店に行って味わってみたくなる性分と

「餃子兄弟」がある堀川沿いの飲食街

なってしまった。

この餃子屋では強力粉100％を使用しており、モチモチ感の皮は、特に美味しい。
昼の餃子定食（焼き餃子８個､卵スープ､ごはん）は600円とリーズナブルである。

ある日、私がランチを注文すると、次から次と「お持ち帰り餃子」を注文されるお客さんが来て、私が食事にありつけるまで20分もかかってしまった。

もし、折尾に立ち寄ることがありましたら、食べに行ってみてはいかがでしょうか。

（やまだ　たつお）

近　　況

よかネット 阿修羅展は大混雑

朝九時半の開門時に行けばスカスカかと思いきや、十重二十重の蛇行行列（一応そこにはテントがあり、オリンピックマラソン選手がかぶるようなキリフキ装置あり）。それに、場内整理のおばさんが「前へピッタリ詰めろ」とやかましく怒鳴る。福岡県の新インフル患者を、ここで増やそうという大変な努力。蛇行の場所を屋外で二カ所、屋内で一カ所、入場後一カ所通過してやっと展示場へ。くたびれて12時過ぎに出てくると、エスカレーター手前の炎天下に蛇行がさらに追加されていて、三時間待ちになっていた。途中で帰らなかった理由は、エスカレーター下で

沙羯羅（さから）立像

①屋内エスカレーター下、蛇行３。前方屋外蛇行１

②写真①の左屋外の蛇行２

③屋内三階でまた蛇行４

④帰りに見た天満宮からトンネル出たところの蛇行

入場券を買わされてしまったから。これが本論。

阿修羅像はよかったが、掛け声をかけられながら周囲を回って見るという仕組みは気に入らない。像としても、沙羯羅（さから）立像の若い悩みの方に心が動いた。この絵はがきだけ買ってきました。もっというと本当のところは、広隆寺の弥勒半跏像に惹かれる。（糸乗　貞喜）

筑前に伝わる「荒神琵琶」を聞く
～仏教琵琶　音楽法要～

「荒神琵琶による法要を聞きませんか」と主催者の田中さんからお誘いをいただいたとき、正直にいうと、荒神琵琶という意味がよくわかっていませんでした。ただ、これはきっと、私が仏教を好きなので声をかけていただいたのだ、しかも自分の住む前原市での公演会。ということで「ぜひ参加します」とお答えした。

かつては、どこの農家も土間や竈などに荒神様を祀り、四季の土用（どよう）ごとに荒神まつりを行っており、天台宗玄清法流の僧侶が琵琶ひきながら経を唱えて回ったそうです。琵琶法師は、千数百年の昔、太宰府に生まれた玄清法印を始祖とすると言われており、筑前琵琶も玄清法流の琵琶を出自としています。日本の伝統文化のほとんどは、東京と関西に集まっていますが、琵琶だけは、福岡を中心に受け継がれているそうです。

公演は、天台宗玄清法流に属する妙音寺の城戸清賢氏、成就院の梶谷隆幸氏、太鼓に華王院の坂本清昭氏ら三名と、特別ゲストに筑前琵琶の中村旭園師を招いて行われました。当日は、悪天候で筑肥線が止まるなど決して恵まれた状況ではありませんでしたが、会場はほぼ満員状態と盛況でした。琵琶によるお経を聞くのは初めてでしたが、旋律のあるお経は、韓国の松広寺（こちらは禅寺）で聞いたものと、どことなく似ている気がしました。

音楽に疎い私の意見により、実際の演奏の様子を youtube で配信するので、興味がある人は「荒神琵琶」で検索してのぞいてみてください。90 歳を超えられてなお力強い琵琶演奏をされる

合奏琵琶による「般若心経」

中村旭園氏の演奏も迫力があります。また、荒神琵琶のわかりやすい解説と映像は、九州国博のアーカイブがあります（城戸清賢氏が出演）。
http://www.kyuhaku-db.jp/dazaifu/archives/26.html　（本田　正明）

社会人学生ならではの楽しみ

４月から九州大学のビジネススクール（経済学府産業マネジメント専攻）に通い始め、夜間の社会人学生となった。昨年子どもが生まれたので、社会人と学生、そして父親という３足のわらじを履いていることになる。

授業は平日の夕方６時～９時と土曜日の朝９時～18時半までであり、その中から自分の興味のあるものを選択する。元々早く終わる仕事ではないのに、平日の夜中や休日は残務に加え学校の予習復習やレポート作成に追われるという、慌ただしいが充実した日々を送っている。

学校で学ぶ科目は、財務、会計、企業倫理、組織マネジメント、マーケティング、英語といった必修科目の他に選択科目がある。マーケティングやプロジェクトマネジメント、統計といった科目は、学んだことを日々の業務に活用してみて、新たな気づきを得ることも多い。日々の業務という実学の場と、学校での経営やビジネスの理論的枠組みを学ぶ座学の場という二つの場を行き来できることが社会人学生の強みであり、面白いところではないかと思う。最近は計画づくりからその事業化までサポートする業務や法人の立上げ支援に関わる機会があり、これから学校で学んだ知識や人脈を仕事に活かす場面が増えてくるのではないかと思う。

学友は42人おり、留学生以外の全員が社会人である。学友達のバックグラウンドはメーカー、商社、システム関係、金融、公務員など様々であり、仕事上の疑問や解決方法を相談することもしばしばである。学生が主体となったイベント、勉強会や同窓会活動も活発であり、このネットワークが一番の魅力である。この機会をできるだけ活かすために、学生会の役員を務めたり、自転車部と称してサイクリングに行ったりしている（おかげで奥さんからは白い目で見られることもしばしばである…）。

最後に、公共交通の定期や買い物の際に学割が使えることも財布に嬉しい実利の一つだ。

今年の10月上旬に平成22年度の学生募集があるとのことなので、興味のある人は学校のホームページを覗いてみてください。
http://qbs.kyushu-u.ac.jp/index.php

（原　啓介）

椎葉神楽へ行きましょう

日時：11月22日午後６時頃～
　　23日朝10時頃
場所：椎葉村栂尾　栂尾神社
人数：あと３～４人。
参加心得：一日氏子、もしくは集落の住民といった気分になること。焼酎二本か、２～３千円包むこと。
申し込み：よかネットor糸乗の携帯・メール
糸乗携帯：080-5245-2477
糸乗mail：itonori@mue.biglobe.ne.jp）
宿泊：一晩中舞っているので宿泊はないのです。舞台のところは寒いので防寒具を。
休む（寝る）ところはあり。できればシュラーフ持参を（屋内畳の部屋）。

（糸乗　貞喜）

編集後記

政権交代により私の身の回りの様々な場面でも変化がありそうです。子ども手当は大変ありがたいのですが、現在関わっている業務に大きな影響が出る可能性があり、戦々恐々です。（は）

よかネット　No. 96　2009. 10
（編集・発行）
㈱よかネット
〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町３番８号
福岡パールビル８階
TEL 092-283-2121　FAX 092-283-2128
http://www.yokanet.com
mail:info@yokanet.com
（ネットワーク会社）
㈱地域計画建築研究所
本社　京都事務所　TEL 075-221-5132
大阪事務所　TEL 06-6942-5732
東京事務所　TEL 042-501-2531
名古屋事務所　TEL 052-202-1411
㈱地域計画・名古屋